

講演（話題提供） 「職場でのバリアフリー～実験的領域という視座」

講師 熊谷晋一郎（くまがや しんいちろう）

1977年生まれ。小児科医。脳性まひの電動車いすユーザー、東京大学先端科学技術センター特任講師。新生児仮死の後遺症で、脳性まひに。以後車いす生活となる。幼児期から中学生くらいまでのあいだ、毎日リハビリに明け暮れる。小中高と普通学校で統合教育を経験。大学在学中は地域での一人暮らしを経験。また全国障害学生支援センターのスタッフとして、他の障害をもった学生たちとともに、高等教育支援活動をする。東京大学医学部卒業後、千葉西病院小児科、埼玉医科大学小児心臓科での勤務、東京大学大学院医学系研究科博士課程での研究生生活を経て、現在、他の障害をもつ仲間との当事者研究をもくろんでいる。

著書

『発達障害者当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい』、綾屋紗月との共著、医学書院

『リハビリの夜』、医学書院（新潮ドキュメント賞）

『つながりの作法 同じでなく違うでもなく』、綾屋紗月との共著、NHK出版

要旨

障害を持った医師が医療行為をする際には、そのリスクが問いただされる。とくに、工学的なリスク管理技術への信仰が高まりつつある現場での風当たりは厳しい。自分の体に合ったオリジナルの診療スタイルの立ち上げと共有を医療現場が支援していくには、組織の中に試行錯誤と失敗が許される実験的な「余白」が必要だと、私は考えている。だがしばしば、余白の広がりにはリスクの増大と同一視されやすい。

ところが組織学習研究の分野では、余白が縮小することのほうが、むしろ新たなリスク要因になるとも言われている。組織というのは、システムとして不十分な初期段階にはいろいろな試行錯誤が許されたり、挑戦が許されたり、余白がまだ生き残っている。その時期はスタッフ一人ひとりが身を持って組織全体のダイナミズムを把握でき、よりよいシステムの更新に能動的に関わっていただける。しかし、そのような更新の結果システムが洗練されていくと余白はなくなり、試行錯誤に対する許容度が減ってルールが自己目的化していく。すると、組織全体を見渡せるスタッフが少なくなるため、かえって突発的な事態が生じた際のリスクが高くなるのだ。余白がリスクの原因なのではなく、適度な余白はリスクを低くするのに不可欠なのかもしれない。

システムが完成に近づくにつれて膠着化するルールが、実はリスク増大の兆候である可能性を、私たちはいつも気に留めておかななくてはならない。障害者への配慮というだけでなく、組織運営の面からも、職場の中に「余白」と更新可能性を維持し続ける条件を考える必要があるだろう。